

真に持続可能な社会とは何か？

稲本 正

はじめに

今泉さんが話されましたけれど、正直言って今泉さんの本はまだ読みやすいです。だけど、『森の生活』を読んでわかった、という人がいたら手を挙げてほしですけれど、たぶん挙げられないと思います。あれはわからない本なんです。私は60歳ですが、これまでに何回読んだか。私は小説家になろうと思ったんです。佐伯彰一という私のおじさんは有名な英文学者で、ヘミングウェイを日本で最初に訳した人ですけれど、『森の生活』ぐらい読めと言われて読んだんです。でも、正直言ってわからなかった。漱石やドストエフスキーはわかるし、おもしろいんですけど、『森の生活』は、はっきりいって、おもしろくない。あれを読んで、おもしろいという人はおかしいんじゃないかと思えます。今泉さんの本だったらわかります。飯田（実）さんの本もまだわかりますが、それ以前の訳の『森の生活』がわかったら、日本語がわかっていないと言ったほうがいいと思います。それくらい面倒な本です。

ただ、この人はものすごい影響を与えているんです。今泉さんが最後に言われましたが、『市民の反抗』（岩波文庫／“Civil Disobedience”）は、ガンジーがロンドンで読んで、ものすごく感銘を受けて「これでいける」と思って、そのエッセイを携えて南アフリカへ行き、まず運動をやってみるんです。そして、「よし、これはいける」とインドへ行って運動をし、インドを独立させたわけです。

ソローの影響を受けて、いろいろやった人はすごい多いです。私もそうです。わからないんですけど、「これはすごそうだ

と思うことがいろいろなところにあります。ガンジーが最初に世界に広めたのだと思いますけれど、それ以外にも、いろいろな人が影響を受けました。環境教育でも、ヨセミテでシエラ・クラブをつくったジョン・ミュアもそうです。

アメリカの歴史はたかだか200年で、私はアメリカへ行って、アメリカ人と論争になって、面倒になると「1400年前に法隆寺ができてね」とすぐ言うんですが、そうすると、「あ、負けた」と言います。本当はネイティブアメリカンの歴史があるのに、だいたい人はそれをネグレクトしているから、千何百年前はないわけです。

アメリカの200年の歴史のなかでソローはどの位置にいるかということ、日本でいえば、紫式部と坂本龍馬と夏目漱石と宮沢賢治を足して4で割ったぐらいの人なんです。市民運動の祖であり、環境文学の祖であり、ある意味では哲学的文学の祖であるわけです。

私は「ソローと漱石の森－環境文学のまなざし」という本を書いているのですけれど、夏目漱石をちょっと読んでからソローを読んだほうがいいのかと思います。意外と似ていないようで似ているんですよ。今泉さんが「法の上の法」と言われましたが、夏目漱石は最後は「則天去私」と言っています。「私利私欲を離れて、天の法に従いなさい」ということで、その意味ではソローと非常によく似た考え方をしている人です。

ソローはやっぱり偉い人で、先のことを相当見通しています。今、CO2がものすごく増えていますけれど、「このまま文明がどんどんいってしまったら大変なことにな

る」とあの時代に言っています。それから、日本の子どもたちは「生きる力」がないといわれていますけれど、そのことはちゃんと見通していて、「このままいくと文明国の子どもの生きる力がなくなる」というようなことも言っています。

私たちがここで議論しなければいけないのは、彼が見通していたとりの世界になってしまったけれど、それを越えるヒントが『森の生活』のなかにあって、「そのとりの世界とはいったいどういう世界なのか」「何を越えなければいけないのか」ということを考えなければなりません。

私は私なりに彼の提示した問題を解決するために、オークヴィレッジをつくって、30年、四苦八苦して、今度、トヨタ自動車のバックアップで「トヨタ白川郷自然学校」を4月2日に開校します。なんと52万坪の土地があります。ここで、ソローが『森の生活』できわめて個人的にやったことを、なんとかより多くの人がわかるようなきっかけをつくって、今の環境問題を解決する糸口をつくりたいと思っています。

環境問題

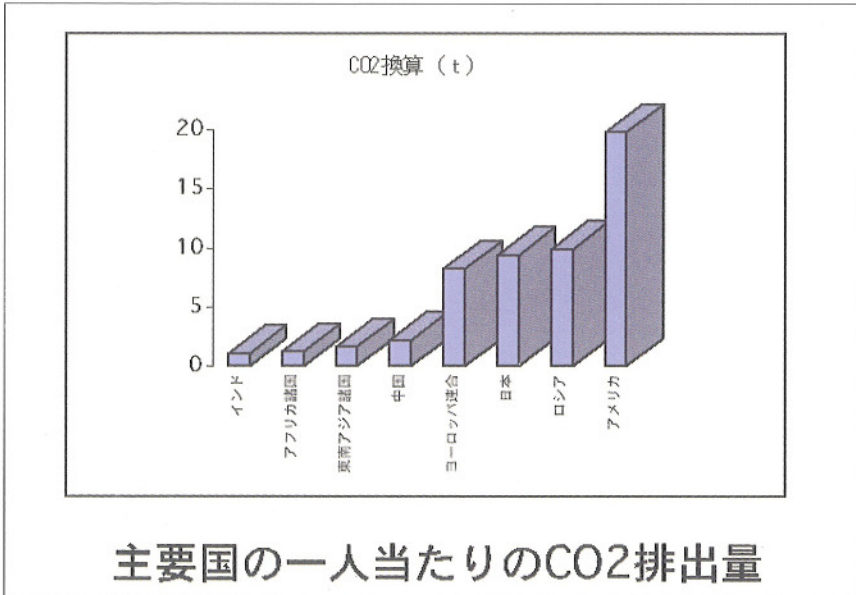
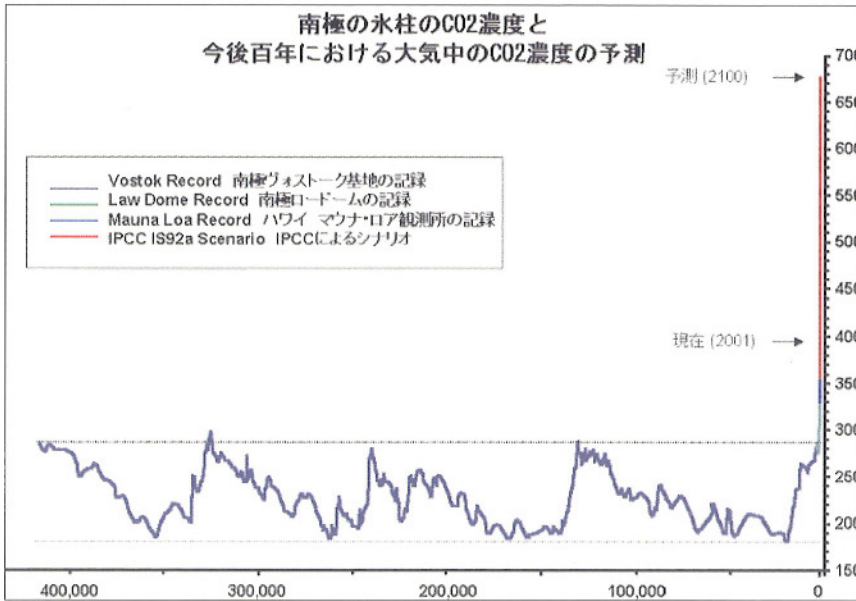
次は有名なグラフです。「京都議定書」が発効され、今、問題になっていますが、40万年前からCO2は180ppmから280ppmの間をゆったりきりきりして、これが自然だったのです。それが産業革命以降、だいたい380ppmになり、280ppmから100ppm増え、180ppmからは200ppmも増えています。

私は30年前、大学に勤めていましたが、「ローマ報告書」が出たときに、「CO2が増えているんじゃないか」という議論があったのです。大学の先生にそう言ったら、

稲本 正 オークヴィレッジ代表

1945年富山生まれ。工芸家・作家。74年、飛騨に工芸村・オークヴィレッジを設立、代表となる。91年には木工・森林のプロ養成を目指す教育機関「森林たくみ塾」を開設。日本環境教育フォーラム常務理事、林政審議会特別委員、ハンズ大賞 審査員なども務める。著書『ソローと漱石の森』（日本放送出版協会）では、ソローと夏目漱石のゆかりの地を訪ね共通点を洗い出した上で、これからの社会に必要な提言を記している。その他、『森を創る森と語る』（岩波書店）、『森の惑星』（世界文化社）など著書多数。





「稲本君、バカなことを言うんじゃないよ。地球は広いんだよ。CO2なんか増えるわけがない」と言う先生が95%ぐらいいたんです。あの先生たちはどこへ行ったのかと思

いますけれど、私はこれはダメだと思いました。私はは下っばでしたから偉い教授は言うことを聞いてくれない。それだったらサンプルを示すしかない。ソローは2年カ

月しか住まなかったけれど、これからの一生は森で生きようと思ひまして、山へ入りました。

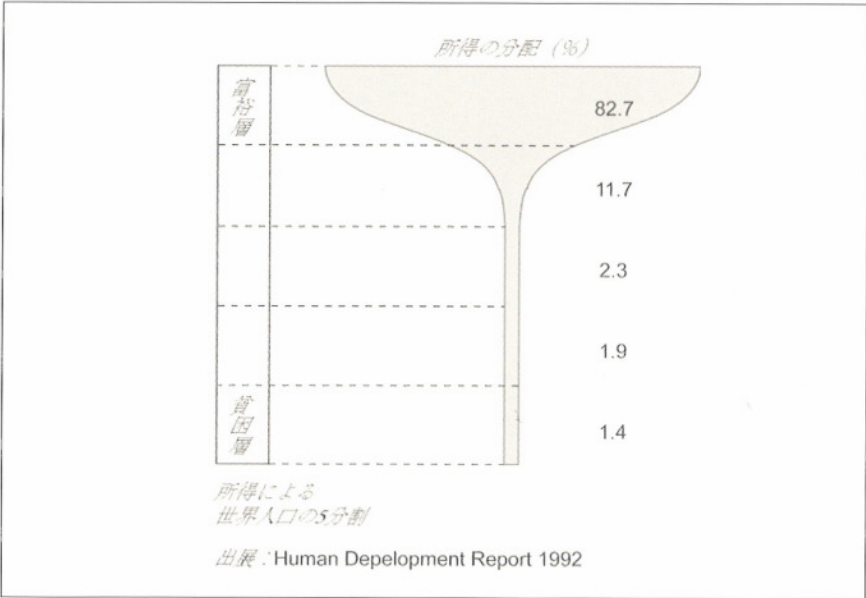
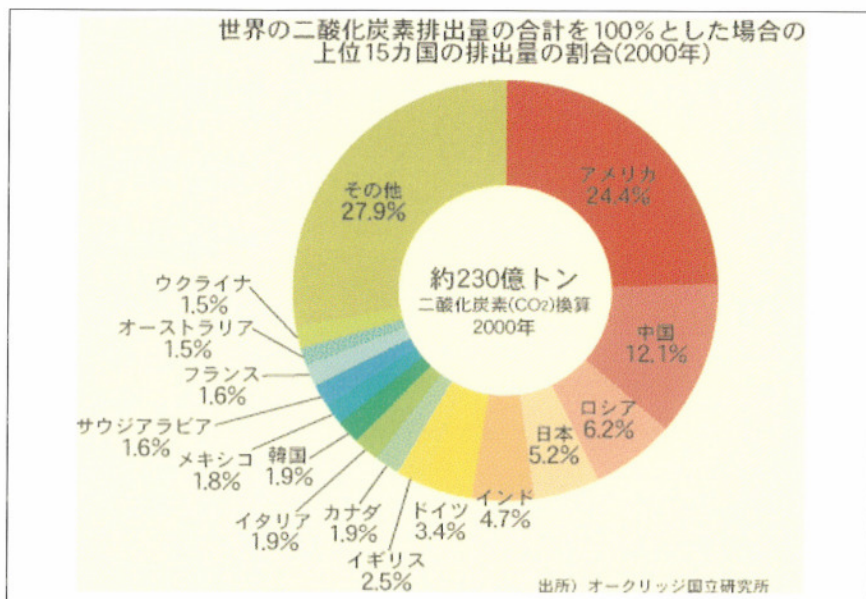
二酸化炭素排出量の割合は、アメリカがトップで24.4%、約4分の1です。このアメリカが京都議定書に入っていない。中国は2番目で12.1%ですが、途上国ということで京都議定書からは抜けています。3番目のロシア(6.2%)がやっと批准してくれました。日本は4番目(5.2%)ですから、日本の役割がいかに大変かということがわかると思います。ソローの母国であるアメリカをなんとか巻き込まなければダメで、そのためにも、私たちはある解答を示してあげることが重要ではないかと思っています。日本はアメリカや中国に解答を示せる立場にいる、それだけの技術も伝統も自然もある、と私は自負しています。

先日、アフリカで3000万本の木を植えて(グリーンベルト運動)、ノーベル平和賞をもらったワンガリ・マータイさん(ケニアの環境副大臣)と話をしました。彼女は「もったいない」という言葉に非常に感激しているんです。私もマダガスカルやアマゾンや、もちろん日本にも木を植えていますが、写真を見た瞬間にわかって、日本へ来てすぐ「もったいない」がわかった外国人は本物だと思いました。そういう人が出てきているので、可能性はあると思います。だから、アメリカや中国を参加させることが、私たちの今後の任務ではないかと思っています。

CO2の排出量がトータルで多いということは、一人当たりの排出量も多いんです。息子がアメリカにいるのですけれど、自然は好きだし、自然を保護すると言うのだけれど、日々の生活はなっていない。贅沢し放題で「もったいない」がないんです。だからアメリカは一人当たりの排出量(20t近く)も多くなっています。

人間が一人生きていて、そのCO2を吸収するのに16本の樹木が要ります。ところが、生活しなければいけない。明かり





があり、スチールの椅子があり、いろいろなものがある、この椅子をつくるだけで、だいたいCO₂を25キロぐらい出しています。純粋の木の椅子だと2.5キロぐらい

でいいのですが、そういうふうにはCO₂をどんどん出します。インドの人は比較的文明を背負っていないので、一人当たり44本の樹木があればいいのです。(日本の文明的

な生活の場合は376本、アメリカのかなり文明的な生活の場合は792本)

もっとわかりやすくいうと、世界の富裕層はほんの少しで、それが世界の富の82.7%を持っています。ところが、貧困層は1.4%の富をみんなで分けています。これを「シャンパングラス」といいますが、地球の文明は非常に危なっかしい形(上から82.7%、11.7%、2.3%、1.9%、1.4%)になっていることがわかります。こういう形ではいけないということを、ソローは早くに言っています。彼は、黒人の奴隷解放運動で地下組織的な動きを相当しましたし、インディオ(ネイティブアメリカン)と交流していました。

ソローにかかわる場所

私は何回もウォールデン湖に行きました。夏に行くと、泳ぎにきたおじさんやおばさんがいっぱいいて、だいぶ俗化しています。ただ、ウォールデン湖を守ろうという「ウォールデンポンド・プロジェクト」があって、アメリカはこういうところはすごいのですが、いざとなると、ものすごいお金が入ります。ドン・ヘンリーという有名な歌手が何億寄付したり、ロバート・レッドフォードやアメリカの俳優たちはけっこう意識が高く、お金を集めてこれ以上は開発されないことになりました。

ソローはウォールデンばかりにいたわけではありません。町から1.6キロですからすぐ歩いていけるところで、そこに住みながら、いろいろなところを旅しました。「メインの森」とか「コッド岬」にも行き、コッド岬については、すごい景勝地でゆくゆくはアメリカ人の別荘地になって目も当てられなくなるのではないか、と書いていますが、今、そのとおりになっています。ジョン・F・ケネディはソローのファンで、ケネディ家はみんなコッド岬に別荘を持っています。

ソローがアメリカのいちばん東に立ったとき、「All America behind me.」(私の後ろ

にアメリカが全部ある)と言っています。コッド岬での最後の言葉ですが、物理的に考えると、東の端に立って日の出を仰ぐとその影がずっと後ろにかかりますから、アメリカが全部後ろになるということで、私もそこへ行って、彼の言葉を砂浜に書いて記念写真を撮ってきました。

ソローが借りていたことがある宿、コロニアル・インはコンコードでいちばんいい宿で、けっこう高く、2万円ぐらいだったかもしれません。それが今もあって、ほとんど変わっていません。日本が文化を大切にしているかどうかということは、コンコードに行くときよくわかります。コンコードの建物の6割以上がいまだに木造です。

コンコードの同じ町の中にある川で、日本はあのぐらいの町だと三面張りにしますが、その意味では、ちゃんと自然の川にしています。このすぐ近くにノースブリッジがあります。

ソロー家の墓のいちばん端に、「ヘンリー」と書いてある小さい墓があります。私は何回か行っていますが、一度はちょうどソローの命日で、花が飾ってありました。なお、コンコードにはソローの名前をつけた道路があります。

オークヴィレッジ

私は20代から30代になるまでにソローの本を4~5回読んでいて、よくわからないけれど、これはすごいことだと思いました。それで、やっぱり森で生活しようと思ったのですが、生きていかなければいけないから、木でモノをつくって生活しようと思定して、30年前にオークヴィレッジをつくりました。

別荘分譲に失敗した山のなかの2万5000坪の土地を、メチャクチャ安く買いました。木はほとんどありませんでした。

オークヴィレッジは三つの理念でつくりました。基本的には「持続可能」ということで、ソローは持続可能と明確には言っていませんが彼の考えをベースにして、「100

年かかって育った木は100年使えるモノに」「お椀から建物まで」「子ども一人、ドングリ一粒」を理念としています。

ソローは意外とドングリとか森林の遷移に関して研究をされていて、「森を読むー種子の翼に乗って」(伊藤詔子訳)に出ていますけれど、ある意味で彼は科学者だったわけです。

オークヴィレッジではいろいろなものをつくってしまして、オルトフォン(ORTO-FON)のカートリッジや木の楽器、家具も建物もつくっています。

また、国際キリスト教大学のところに苗畑を持っていて、ドングリの会で、その苗を山に植えています。私たちがあの地に入ったときは荒地の生活だったので、ここに木を植えました。ソローは豆はきらいで、米が好きだったのですけれど豆を植えていました。ぼくらは米を植えました。しかし、みごと失敗して、農業では食っていけないことが証明されて、急ぎよ、木を植えました。昔の写真と見比べると25年でどれだけ違うかよくわかります。

ソローと同じように自分の家もつくりました。家の周りに小さい木があります。家の周りの木が25年でもものすごく大きくなりました。家の周りだけではなく、富士山とか、いろいろなところに木を植えています。木は育つんです。ソローは明確な植林はしていないのですけれど、ドングリを集めて苗を育てたりしていました。

トヨタ白川郷自然学校

私は60歳になって、新しいことを始めたかと思って、トヨタ自動車と組んでトヨタ白川郷自然学校をつくりました。私は環境派はすごくマイナーですが、マジョリティにならなければダメだと思っているんです。ドイツは徐々にマジョリティになりつつあります。そのためには、いろいろな人と組んで広がっていくということがなければいけないと思っています。マジョリティになるためにはデザインも必要なので、友

人の浅葉克己さんにマークをつくってもらいました。

トヨタ白川郷自然学校は、企業と環境NGOと白川村と一緒にやってやります。白川村は合併せずに、一村独立で頑張ってくれています。一般に開放し、マジョリティに訴えます。周りの自然で壊れているところを回復させようと思っているんです。

この家具はオークヴィレッジがつくりました。レストランでは、なるべく地元の素材を使います。氷見港が近いので、その魚も使います。地元は日本料理なので日本料理はご法度ということで、フランス料理を出します。温泉もあります。

私もモノをつくっていたので、もちろんモノづくり工房があります。これは地元の余った材、間伐材のようなものでつくっています。大きい催事ホールもできました。52万坪ありますから、ソローの小屋と同じものを建てて実践したうえで、報告会をやらなければならないと思っています。

白山の麓で52万坪というのは本当に広いです。どれくらい広いかということの説明するときに、「見渡すかぎり全部です」と言える広さです。ところが、その横にトンネル残土があります。建物が建っているところは3~4ヘクタールしかないのですけれど、目の前に、なんと6ヘクタールの砂漠ができてしまったんです。それで今、木を一生懸命植えています。

絶滅危惧種のギフチョウがいたので、ギフチョウを助ける運動をやります。ほかにもいろいろなハードなプロジェクトがあります。加須良という秘境中の秘境までの道が途絶えていて、そこに行きたいという人がいるのですが、白川郷に住んでいるのに行けない。そこで、昔、蓮如上人が通った道をつくり直すというプロジェクトをやっています。1日1キロ進む予定でしたが、300メートルも進まなかったんです。なかなかたいへんな仕事です。

環境技術もやらなければいけないので、燃料電池の模型を体験するようなプログラ



ムをやっています。また、合掌造りガイドや不耕起冬期湛水稲作プロジェクト、わら細工などをやっています。それから、白川は養蚕をやっていたのですが、今はやめています。そこで、天蚕といまして、ナラの葉を食べる緑色の蚕を一生懸命育てています。

私はもう60歳になりましたが、家を建てたのは27～28歳のときで、今のオークヴィレッジの奥に建っています。ソローが建てたソーラーハットとまったく同じサイズのもので、仲間と一緒に建てて実験的に住んでみましたが、今泉さんが言われたように、現代、こういうところに住むのはなかなか大変です。でも、私の弟子は本当に2年半住みました。それでオークヴィレッジをつくって行って、今、家具をつくっています。

ソローの問題提起

ソローは、精神を高めなければダメだ、いくら文明が発達しても、はたして人間が幸福になっているかどうかあやしい、というようなことを言っています。特に日本の子どもを見てみると、たしかに生物としても弱くなっている。頭はけっこう良いのに、本当にクリエイティブなことをしているのか、本当の喜びは何か、といったとき、どうも危ないのではないか。アマゾンの子どものほうが元気で楽しいんじゃないか。そういう問題提起だと思っています。

もう一つ、ソローは環境問題の祖ですから、鉄道が通ったとき、この鉄の魔物みたいなものが世界中に広がると、とんでもないことになると言っていました。それが現実になったわけで、それをどう超えていくか、私たちは叡知を出すべき時期にきているのではないかと思います。万博も「自然の叡知」といっています。

最後に、差別を含めた民主主義の問題というか、ワンガリ・マータイさんも言っていますが、環境運動は平和運動も含めてやらなければいけないわけで、人類の未来を彼が言ったこととどうつないでいくかとい

うことは当然課題になると思います。

「実践」はすごく重要で、そのなかでも、個人なり集団なり施設なり、こうやれば成功するというモデルをつくるのが何よりも大切だと思います。人類はこれだったら生き延びる、こうやれば本当に豊かになるというモデルです。私は万博の「EXPOエコマネー」にかかわっているのですが、環境に良いことをしたらポイントがもらえて、そのポイントを森林に寄付することもできるし、そのポイントで環境に良いものが自分に返ってくるという仕掛けをつくっています。

そういうことをやれば、たしかによくなるのです。やればまだできるのですけれど、ただ、もう時間がないのです。2050年を超えると、人類が努力してもダメになるのではないかとわれているのです。これから四半世紀の間、ソローが言ったことをベースにして、私たちがどこまで実践できるかどうかメドになるのではないかと思います。